

# 失恋する方法、おしえてください

*Hinami & Kei*

---

槇原まさ

*Maki Makibara*

termity



エタニティ文庫

## 目次

失恋する方法、おしえてください

5

書き下ろし番外編

一番を、おしえてください

337

失恋する方法、  
おしえてください

『こんばんは。ナビゲーターの西條要です。今夜のクロスムーブ、登場ゲストは——』  
FMラジオから流れる甘みを帯びた男性の声が、六畳の自室を満たす。これは毎週金曜夜のお楽しみだ。瀬田ひなみは、縫い上がったばかりのオックスフォードシャツを人台に着せながら、満足気に頷いた。

(うん。いい感じ)

少し脇線を絞っている作りだから、余計な皺やたるみが出にくい。着用した時にすっきりとしたシルエトになって、彼のスタイルを更に引き立ててくれることだろう。

爽やかな印象のサクソンプールは空を思わせ、季節を選ばない。やっとな手に入ったこだわりの生地だ。彼の印象にびったりのはず。

今は一月で寒さのピークを迎えているが、上に冬物ニットを重ねれば問題ないだろう。(今度はいつ帰ってくるのかなあ。お正月に帰ってきたばかりだから、当分先かな)

このシャツをプレゼントしたい相手——小川啓の整った顔立ちと長身を思い浮かべる

だけで、頬が緩む。そんなひなみの表情に合わせるかのように、ラジオからは好きな曲が流れてきた。

ひなみはメンズ服のパタンナーだ。パタンナーの仕事は、デザイナーが二次元に描いたデザインを、服という三次元にするための設計図を書き起こすこと。

服好きが高じて大手アパレルメーカーのショップ店員として就職したひなみなのだが、気が付けば異動でパタンナーの役割を任されてしまっていた。

別にパタンナーを目指していたわけではなかったから、当時はこの辞令に動揺したものの、結果この異動が転機になった。

ひなみは自身が小柄な体型ということもあり、既製服のサイズが合わないことも多く、服のアレンジを頻繁にしていた。服飾学校で服の構造も勉強していたし、パタンナーに向いていたのかもしれない。

パタンナーになれば、自分の引いたパターンが製品ラインに乗る。自分の関わった服が店頭で並んだ時には感動したものだ。当然、やり甲斐だつてある。

パタンナーになって三年。今は仕事が楽しくて仕方がない。仕事だけでは飽き足らず、暇さえあればこうして家でも自作のパターンを引き、服を仕立てているくらいだ。

(この色のシャツは啓くん持ってなかったと思うんだけど。気に入ってくれるかなあ。気に入ってもらえたら、次は同じパターンで白を縫おう。定番カラーだし、たぶん一枚

あると便利なはず……)

その時には、この間手芸屋で見つけたサイコロ型のボタンを、袴とカフスに付けてみようか。シンプルながらも遊び心があつて、いいかもしれない。見る人が見れば気が付いてもらえる、そんなさり気なさが、きっと彼には似合うはず——

啓を思うだけで、創作意欲が止めどなくあふれてくる。

彼に似合う服を、彼をもっと素敵に見せる服を作りたい。それがひなみの服作りの原点だ。

(あ。でも啓くんは立体ボタンだといやがるかも。平面でかつこいいボタンをもっと探して——)

「ひなみ！ ちょっと、ひなみ！」

ドタドタと足音を響かせながら階段を上がってくる母親の声に思考を中断されて、ひなみは人台から手を離れた。

「どうしたの？ お母さん」

部屋に入ってきた母親をきよんとした顔で出迎える。そんなひなみとは対照的に、母親は頬を軽く紅潮させ、ニヤニヤと好奇心丸出しだ。その手には、バトンのように丸まった週刊誌が握られている。

「ねえ、啓ちゃんに彼女できたって知ってた!？」

「っ!？」

突然もたらされたニュースに、ひなみの心臓がビクッと跳ねた。

内心では充分驚いているくせに、それを表情には出さないようひた隠しにして、「へえ〜」だなんて言うひなみの視線は、母親の手にある週刊誌に釘付けだ。

表紙が折り返された週刊誌には、『人気俳優・西條要(26)密会デート』の見出しが白抜きでデカデカと踊っている。続きは……残念ながら読み取ることができない。

西條要はひなみが手作りのシャツをプレゼントしようとしている相手——つまり小川啓の、芸名だ。今、背後で流れているラジオ番組のナビゲーターでもある。

彼は十六歳で雑誌モデルとしてデビューを果たし、そのあと俳優に転身した。その王子様のような甘いマスクと声で、女性からの支持率は圧倒的。演技力も定評があり、ドラマアカデミー主演男優賞を受賞したこともある。今や映画にドラマにバラエティにと、引つ張りだこの人気俳優だ。そして、ひなみの幼馴染みで、子供の頃から未だに続く片想いの相手でもある。

もちろんひなみは、俳優・西條要のファンだ。こうしてラジオの視聴も欠かさない。もともと、ひなみの場合は幼馴染みの啓のことが好きだから、同一人物である西條要も好きなのだ。

彼は不定期ではあるものの、月に一、二回程度の割合で地元に戻ってくる。そしてひ

なみの両親が営いとなんでいる喫茶店に顔を出していくのだ。

「あんた知らんかったん？」

「知らないよ」

「知るわけないでしょおおお!? えっ、えっ? 密会デートって何っ!? 誰と!？」

娘ひなみの視線が週刊誌から離れないことを知ってか知らずか、母親はそれをブンブンと振り回す。週刊誌が上下するたびに、ひなみの顔が小刻みに動いた。

「なんだ。あんたならなんか知つとるかと思つたのに。つまーんない」

母親はひなみの部屋に入ってくると、人台ゴアイが着ている真新しいシャツの袖をひよいと持ち上げた。

「新作できたんね。爽さわやかないい色やーん? 啓ちゃんに似合いそう」

「う、うん……。喜んでくれたらいいんだけど……」

生返事を返しながらも、ひなみの視線は母親の手が持つ週刊誌に向いている。

角度が変わって、『お相手は』——まで見出しの文字が読めた。

（お相手は? 誰? 誰? わたしの知ってる人?）

西條要——もとい、啓には、今まで浮いた話なんてひとつもなかった。学生時代だって、付き合っていた女の子がいたのかさえ謎だったくらいなのだ。だからこれは初スキャンダルと言っている。

西條要のファンとして、いや小川啓の幼馴染みとして、いやいや小川啓に恋する者として! 密会デートの相手は大いに気になる。

「これ、今度啓ちゃんが帰ってきたら渡すん?」

「うん。そうするつもり。バレンタインも近いし——」

「啓ちゃんのこともいいけど、あんたは? 誰かいい人おらんのか?」

矛先が自分に向けられ、ひなみは苦笑いしながら口籠くちごもつた。

「わたし? わたしは……そんな……」

——ピリリリリッ。

突如部屋に響いた着信音によって、母娘おやこの会話が遮おさられる。

ひなみは急いでラジオのボリュームを下げ、ベッドの枕元に置いていたスマートフォンを取った。画面には、二年前まで同じ職場で働いていた先輩パタンナーである石上哲也いしがみてるの名前が表示されている。

「電話?」

「うん。石上先輩から。ちよつと出るね」

一言断って通話ボタンを押すと、背後で母親が「もう夜遅いんだから早めに寝なさいねー」と言い残し出ていった。

「はい、もしもし」

「お、瀬田。こんな時間に悪いな。今、大丈夫か？」

受話器の向こうからハキハキとした明るい声が聞こえてくる。ひなみは西條要の密会デートの真相が気になりながらも、一旦それは頭の端に追いやって背筋を伸ばした。

石上は、ひなみがパタンナーになりたての頃、パタンンのいろはを直接教え込んでくれた人だ。一緒に働いたのは一年弱と短い時間だったが、彼はとても仕事熱心で、今は独立してアメリカ系のオリジナルブランド、「STONE・STORM」を立ち上げている。

ひなみが最後に指導したパタンナーだからか、いろいろと世話をやいて、退職後も時折こうして電話をくれる。年は十歳ほど上だったが、とても尊敬できるし、気さくで話しやすい人なので、なんとなく縁が続いていた。

「はい。大丈夫です。お久しぶりですね、先輩。お元気ですか？」

「おー。元気だ。今日はさ、折り入って相談があつて連絡したんだ」

「相談……ですか？」

石上からひなみに相談があるなど初めてのことだ。先輩である彼が、自分のような駆け出しパタンナーに何を……と不思議に思いながら、ひなみは話を促した。

「独立して二年になるんだが、取引先も増えてだいぶ軌道に乗ってきたんだ。いいことなんだが、さすがにそろそろ一人じゃ手が足りなくなってるさ」

贅沢な悩みだと彼は笑う。

（わたしに誰かいいパタンナーを紹介してほしいってことなのかな？）

外注先が欲しいのかもしれない。そう彼の相談内容に当たりを付けながら、知り合いのフリーパタンナーを何人か思い浮かべてみる。すると、途端に石上の声が神妙になった。

「それでさ……瀬田に俺んところに来てもらえたらありがたいんだけど」

「わ、わたしですか？」

まさかの指名に、ひなみは思わずパチクリと目を瞬いた。

石上の事務所は東京にある。一方のひなみは神戸にいたので、だいぶ距離がある。それにひなみには、今の会社を辞める予定や意思はなかったのだ。実家から通えるし、休みもちゃんともらえる。給料もそれなり。不満なんてひとつもない。石上もそれは承知の上のようだった。

「軌道に乗ってきたと言ってもまだ二年目だ。これから何があるかわからない。今の会社で働き続けたほうが、瀬田にとつていいこともわかつてる。ただ俺が……できるなら……また、瀬田と一緒に働けたらいいなと……思つてだな……」

後半を濁した石上は一度言葉を切ると、今度ははっきりと言い直してきた。

「勝手な誘いをかけてる自覚は充分ある。だが瀬田の腕を見込んで頼みたい。俺のところに来てくれないか？」

「わ、わたしなんかそんな——」

実力以上の評価と期待を寄せられていることに困惑したひなみが反射的にそう言うと、石上の声が入った。

『わたしなんか』なんて言うなよ！俺が教えてきた新人の中で、おまえが一番センスあった。それに俺にはわかる。おまえ、日常的に自分でデザインしてるだろ？』

「どうしてそれを——」

ひなみの会社では、デザイナーとパターンナーは完全分業だ。ひなみの仕事はパターン制作であって、デザイナーではない。デザイナーの領分にパターンナーが立ち入ることを嫌う人もいる。逆もまた然りだ。それに、いくら服が好きだからと言っても、休日にもまだ服を作りたい人間はあまり多くない。だからひなみは、自分がプライベートでデザインをしていることを、同業者には一度も言ったことがなかった。なのに、石上は勘付いていたのだ。

「わかるよ。おまえのパターンは、デザイナー目線なんだ。デザイナー画に描いてあることを寸分違わず再現しようとするパターンナーが多い中で、おまえは常にできあがりを意識している。いいことだよ。それにミシンテクニクも最強だ。縫製オペレーター並みだからな。だから、俺にはおまえが必要なんだ」

「あ、ありがとうございます……そんなふうに仰っていただけなんて……」

不意に褒められて、スマートフォンを耳に当てたまま、ここにはいない石上に向かって

て頭を下げる。尊敬する人にごここまで言ってもらえるなんて、純粹に嬉しい。しかも、会社に誘ってもらえるなんて。

「俺も自分のデザインを自分でパターンに起こしたい。それで手が回らなくなってきたなら、こりゃもう自分と同じ考えの奴を入れるっきゃないだろ？俺がおまえに来てほしい第一の理由はそれだよ。もちろん、給料面や休みは今の会社の条件より悪くするつもりはない。ちよつと考えてみてくれないか？」

「……は、はい……」

それからは、石上が会社の状況を事細かに語るのを聞いて、電話を終えた。

(ふう……なんか驚いちゃったな……)

スマートフォン画面を指先で擦り、小さくため息をつく。いつの間にかラジオ番組は次に移っていた。週に一度、啓の声が聞けるチャンス逃したことに落胆を覚える。

ふと振り向くと、人台の前にあるちゃぶ台に、雑誌が広げて置いてあった。西條要の密会デートを伝える、あの週刊誌だ。

母親が置いていったであろうそれに吸い寄せられるように近付き、ラグの上に座って読みふける。

気になる密会相手として報道されていたのは、本郷葵。

(ああ……本郷葵さんってあの……)



西條要と同じく、ティーンズ雑誌のモデルから女優へと転身した人物で、正統派の美女だ。おまけに巨乳。

数年前の月9のドラマで啓と共演したから、ひなみも覚えていた。その時の二人は脇役だったが、主役に引けをとらない存在感で、当時ずいぶん話題になったものだ。

誌面には、二人が都内のホテルから揃って出てくるところが掲載されている。離れた場所から撮影されたものなのか、画質の粗い雑な白黒写真だったが、並んだ二人の姿はそれこそドラマのワンシーンのようで、とても絵になっていた。

（本郷葵さんってこんな写真でも綺麗……。きつと実物はもつと綺麗なんだろうなあ……。わたしもこの人みたいに綺麗だったら……）

無意識に自分の頬を擦ってしまふ。作業用のでっかい眼鏡のフレームに、指先が当たった。

十人が十人、美女だと評するであろう彼女と、誰の目にもとまらない量産顔の自分を比較するのもおこがましい。まさに月とすっぽん。すっぽんはすっぽんらしく、素直に首を竦めるに限る。

じつと見つめていた誌面から目を逸らし、ひなみはスマートフォン画面の画面を突いた。ブラウザのお気に入りから、西條要のブログをタップする。

ブログには今日のラジオ放送のお知らせと、バラエティ番組で共演した男性タレント

とのツーショット写真が掲載されていた。たくさんのファンからの応援コメントが並ぶブログをひと通り眺め、今度は検索窓に「本郷葵」と入力し、彼女のブログを表示する。新しい映画の撮影に挑む彼女は、美しく整えられた髪型や綺麗な衣装の写真をアップし、「頑張ります！」と意気込みを記している。そこにも彼女の美貌を褒め称え、撮影へ期待を寄せるファンのコメントがたくさん並んでいた。

眼鏡を外してちゃぶ台に突っ伏したひなみは、顔を覆うアッシュブラウンの長い髪を避けもせずに「はーっ」と深いため息をこぼした。

これが彼らの世界なのだ。顔形が違う以前に、自分とは生きている世界がまるで違う。ひなみがブログを開設し、「次回作、頑張ります！」と決意表明をしたところで、その情報をいったい誰が求めているというのか。

けれども西條要と本郷葵は違う。彼らが配信する情報のひとつひとつ、写真の一枚でさえも、多くのファンが待ち望んでいる。

芸能界という世界は不思議だ。そこに生きる人たちが自分と同じ人間だということを頭では理解できても、どこか違う存在のように思ってしまう。

ひなみは自分がスポットライトを浴びるシーンなんて想像つかないし、まず人前に出て自分を見てもらおうなんて思えない。そんな自信なんてない。ただ仕事をこつこつと

こなし、特にこれといって代わり映えも事件もない日々を過ごしていくだけなのだ。ただ、啓とは生まれた時からの付き合いだから、感覚が他の芸能人に対するものと違う。まずは家が近所で、産院が同じ。母親同士は妊娠中から交流があり、啓が二日先に生まれたものの、幼稚園、小学校、中学校、果ては高校と、ずっと一緒。それで今でも時々顔を合わせるから、彼が遠い世界の人だという実感は薄いのだ。だがそれは、ひなみが麻痺していただけの話。

啓は西條要であって、西條要は自分とは違う世界に生きているのだ。そして西條要には、本郷葵のような華やかな女性がパートナーとして似合っている。ひなみの目から見ても明らかに、西條要と本郷葵は同じ世界に生きていた。

啓に恋するこの気持ちがいっから自分の胸にあつたかすら思い出せないくらい、ずっと彼を想っている。一緒に過ごしてきた時間だつてきつと誰よりも長い。お互いになんだつて話してきた。だから、今まで自分の気持ちを伝えるチャンスはいくらでもあつたはずなのに、ひなみは啓に告白できないでいる。

理由は明白。

自分たちはずっと、家族ぐるみでの付き合いをしてきた。啓は昔からひなみの両親が経営する喫茶店にひよつこりと顔を出し、ひなみも啓の両親に会えば実の娘のように可愛がってもらえる。そんな中で、一步を踏み出すことは、逆に難しい。うまくいけばいい

が、そうならない可能性だつて充分にあるのだから。

自分の気持ちと啓の気持ちと同じでなかったら……そう思うと怖い。

今の間係を壊すことを恐れ、無意識にブレーキをかけていたと言つてもいい。そうしている間に二十六年の月日が経ち、啓は押しも押されぬ売れっ子俳優になつてしまった。

西條要の密会デートの真相がどうであれ、もう自分と彼の住む世界が違いすぎて、とてもこの気持ちを告げることなんてできないのだ。

(もー……いい加減に諦めないとなあ……)

ちゃぶ台に突つ伏したまま、雑誌を閉じる。視線はいつの間にか、人台ホテイに着せた新作のオックスフォードシャツへと移っていた。

啓は、ひなみが作った服は全部受け取ってくれる。服だけではなく、帽子やマフラーやアクセサリー類といった小物に至るまですべてだ。

ひなみだつてアパレル業界でそれなりに勉強してきたわけだから、啓に似合うものを作る。品質だつて、ブランド品に負けてはいない。ミシンも縫製工場はうせいで使われている工業用を使っているし、何よりひなみはプロのパタンナーだ。啓の身体に合ったパターンをいくつも持っている。ひなみの作品は、啓のためだけにあるオリジナルブランドだ。

彼はひなみの作品を気に入ってくれているのか、バラエティやトークショーなど、衣

装指定のない番組にはひなみの作った服でよく出演している。

でもそれだけだ。

ひなみと啓を繋ぐつなものは、幼馴染おきななじみという立場と服だけ。あの服は啓を輝かせてくれるかもしれないが、ひなみの世界と啓の世界までは繋げてくれない。

ひなみはどう足掻あがいても芸能人にはなれないし、啓の世界には届かないのだ。その距離が苦しい。

早いところ啓への片想いを終わらせてしまわないことには、自分はずっと前に進めない気がする。

（わたしは、美人じゃないし……本郷葵さんみたいな綺麗な女優さんにはなれないもん……告白されたこともないし、モテたためでもないし……はあ……）

そう思うと、途端に啓に会いたくなくなってきた。しかしここは啓の地元だ。地元に戻ってきた啓は、律儀にもひなみの両親の喫茶店に顔を出す。ひなみは会社が休みである土日はその喫茶店を手伝っているため、どうしてもそこで啓と顔を合わせることになるのだ。

今まではそれが楽しみだった。啓と二人で話をして、新作の試着を頼んで——変わらない日常の延長を送ってきたのだ。しかし、その先がまったく見えない。二十六年間何もなかったのだ、今更何かあるとは思えない。たぶん自分たちはこのまま幼馴染みの域

を出ないのだろう。

（転職……か……）

ひなみはオックスフォードシャツをぼーっと見つめながら、石上の誘いを思い出していた。

普段啓は東京に住んでいるし、石上の会社も東京だ。転職するとすると、ひなみは上京しなくてはならない。上京すれば啓との物理的な距離が縮むことになるわけだが、人の多い東京でまさか偶然彼と鉢合わせするなんてことはないだろう。

啓は忙しい身の上だし、オフはたいい地元に戻っている。ひなみが東京に住むほうが、むしろ会う機会は減るはずだ。

というよりこのままでは、啓が地元に戻ってくる度に、ひなみは彼と会わなくてはならない。そんな生活が続くほうが辛いのではないか——

（転職……してみようかな……）

今まで実家を離れたことはないし、転職だって初めてだから不安もあるが、こうでもないし自分は、この不毛な恋を終わらせることができな気がする。

ひなみは啓への恋心に終止符を打つために、転職の道を決意していた。

会社に辞表を出し、ひと月になろうとしていた二月最後の土曜日。ひなみは両親の喫茶店を手伝って、ホールに入っていた。

ひなみの実家は商店街の入り口に位置しており、一階が喫茶店、二階三階が住居スペースだ。近くにオフィスビルやマンションがある上に駅に近いから、個人経営の喫茶店でも昼時はそれなりに繁盛している。

昼時のお客が引けて、店に余裕が出てきた頃、裏口の戸が開いた。

「あら啓ちゃん！ おかーえりー。入り入り」

母親の応対する声で啓の訪れを知ったひなみは、お客が帰ったあとのテーブルを片付ける手を止めた。俯き加減で息を詰めたまま、様子を窺うように聞き耳を立てる。

西條要の密会デートの続報はなかった。あれから某国の核開発問題や、人気アイドルグループの解散報道などが立て続けにあって、自然に風化した形だ。だが、ひなみの中ではまだ残っている。真実が聞きたいと思いつつも啓からはなんの連絡もないし、ひなみもまた聞けないでいた。

「啓ちゃん。雑誌見たわよお？ なあに？ あの人の彼女なん？」

「やだなあ、おばさん。あんなガセネタなんか信じないでくださいよ。絶対にないですから」

断言する啓の声が漏れ聞こえてきて、ほっと息をつく。しかし、いつか啓にも恋人ができて、ひなみはそれを報道で知る日が来るのだろう。その時、にこやかに笑って啓を祝福することができるだろうか？ たぶん、できない。本郷葵との密会デートを否定する啓の声に、今こんなにも安堵しているのだから。

だから彼を諦めるために転職を決めたのはよかったことなのだと改めて思い、ひなみは顔を上げた。トレイに食器をのせてキッチンに戻ると、お正月ぶりに会う幼馴染みがおきにいる。

さらりとした少し長めの髪に、キリッとした目元。おまけに彫りが深くて鼻筋も通っているから、顔のパーツや配置のすべてが計算し尽くされているかのような印象だ。

テレビ越しや雑誌で見るとはるかに魅力的な啓は、ひなみの大切な幼馴染み。

でも今は鼻の頭がちよっぴり赤い。きつとこの寒空の下を歩いてきたのだろう。手袋を忘れたのか、すり合わせた手に息を吹き掛けている。

「よっ。ひなみ」

右手を軽く上げてくる啓に、自分でも意図せずに頬が緩む。ああ、自分はまたこの人

が好きなんだなあと思った。こんなことでは駄目なのに。

「啓くん、おかえり」

「ひなみ。ここはいいから、啓ちゃんに二階が上がってもらい。あとでコーヒー持つてくから」

お客の会計を終えた父親がキッチンに顔を覗かせると、啓は爽やかな笑みを振りまいた。カメラなんか回っていないのに、テレビで見る王子様スマイルと同じだ。

「ありがとうございます、おじさん。俺、おじさんのコーヒーを飲むために帰ってきてるようなもんですよ。おじさんのコーヒーマスターが一番うまいから」

「そうかい？ 嬉しいこと言ってくれるねえ」

顔を皺々しわしわにしている父親は、確実に照れている。

ひなみは流しに食器をつけて、エプロンを外した。

「啓くん、行こ？」

「ああ」

一度外に出て、裏から続く階段を上がれば、そこはもう瀬田家の住居スペースだ。ちなみに、三階がひなみの部屋である。

子供の頃から遊びに来ていた啓は、勝手知ったると言わんばかりに、コートも脱がずにリビングの二人掛け用ソファに腰を下ろした。

「はー。今日は寒いな」

「ほんと寒いね。待ってね、今ヒーター付けるから」

ヒーターのスイッチを入れて振り返ると、啓と目が合う。彼は背凭せもたれに肘ひじを突き、じつとひなみを見つめていた。

強い視線に囚とらわれて、たじろいでしまう。芸能人だからかはわからないが、啓は人よりも眼力がある。睨にらまれているとは思わないが、正面から見つめ返すのは幼馴染おきななじみのひなみでさえ多少の度胸を必要とするくらいだ。

特に二人っきりの時には――

「なあ、ひなみー」

「な、なあに？」

意を決して啓に向き直ると、彼は自分の唇を親指でなぞりながら、気怠けだるそうに尋ねてきた。

「おまえはあの報道信じたりしてないよな？」

あの報道とは、本郷葵との密会デートに他ならないだろう。

「信じてないよ」

何を心配しているのかとくすりと笑って軽い口調で返事をすれば、啓は「ならいい」と言っって目を逸そらす。

「そうだ。新作できたんだよ。持ってくるね」  
 「またかよー。俺はおまえの着せ替え人形じゃないんだぞ」  
 後ろで啓の呆れた声が聞こえるが、それは気にしないでおく。  
 ひなみは、アイロンがけをして畳んでいたオックスフォードシャツを、自分の部屋から持ってきた。

「どうかな?」

広げて見せると、啓はソファの背せまた凭たれに預けていた身体を起こしてシャツの裾すそに触れた。

「へえ。いい色だな。この色は持ってなかった気がする」

「でしょう? あの……着てくれる?」

ひなみが上目遣いで頼むと、啓は鼻から浅い息を吐いて上着を脱ぎだした。

パサッと軽い音を立てて、まだ体温の残るグレーのニットがソファに置かれる。

あらわれたのは肌着代わりの黒いTシャツだ。襟ぐりが大きく開いているから、鎖骨までよく見える。それに結構身体にフィットしている。

（わあ、何度見てもいい身体。わたしの人台ゴアイはなんかちょっと猫背なんだよね……やっぱり啓くんの身体がわたしの理想かも）

胸の前で指を組み合わせ、目をキラキラさせながら見つめていると、啓が半目でいやそうな顔をした。

「……あのさ、俺が目の前で脱いでるんだから少しは恥じらえ。ドキドキしろよ。な?」

「え? なんで?」

「なんでって……おまえなあ……」

啓は呆れているようだが、実はひなみは男の人に目の前で服を脱がれることに抵抗がない。

ひなみは過去何度も啓にプレゼントする服を作ってきた。ついさっきまで彼が着ていたニットも、実はひなみが作ったものなのだ。まだ手作りに慣れていない頃は、仮縫いの状態でのフィッティングモデルを繰り返し彼に頼んでいたし。それこそ、Tシャツ一枚、パンツ一枚の状態で、いやがる彼の全身を採寸しまくったこともある。

それに加えて、仕事でも男性のフィッティングモデルの身体をじっくりと見る機会は多くあるので、啓に限らず男性の下着姿は見慣れているのだ。

「相変わらず啓くんはいい身体してるね。啓くんの身体で型を取った人台がほしいな。ほんと理想的。元モデルにフィッティングを協力してもらえるなんて幸せだよ。眼福、眼福」

思っていることをそのまま言うのと、啓はうへっと苦笑しい顔をした。

「身体目当てみたいなこと言うな。気色悪い」

啓は小さくため息をつきながらも、黒Tシャツの上に新作のオックスフォードシャツを羽織はやおつてくれる。

ひなみはボタンをとめるのを手伝ってから、彼のまわりを一周した。肩幅も袖の長さも丈も、啓にジャストフィットだ。爽さわやかな色も、彼によく似合っている。

「大丈夫そうだね。ちよつと腕を上げてみて？」

「ピッタリだ。動きやすい」

腕を上げながら啓が腰をひねる。アームホールが大きいほうがゆつたりしていて着心地がいいと思われがちだが、実は違う。アームホールが大きいと、腕を上げた時に裾すそまで引き上がって重たく、動きにくく感じてしまう。しかしアームホールが小さければ、そんなことにはならないのだ。

啓も含めて昨今の男性は細身の人が多いから、ひなみはパターンを引く時、意識的にアームホールを小さくして高い位置にしていた。こうすると袖も細く仕上がるから、重ね着をしても腕がもたつくことがない。

食器棚のガラス扉を鏡代わりに使っていた啓に、ひなみはさつき彼が脱いだニットを差し出した。

「寒かったら上にこれを重ね着してみたらいいと思う」

啓は言われた通りにニットを重ねて、改めてソファに腰を下ろした。

「ちよつどよくなった。気に入ったから、もうこれ着て帰る」

試着の時の啓はいつもイヤイヤ仕方なくといった感じなのだが、なんだかんだ言いながらもちゃんと協力してくれる。そして最後には決まって「気に入った」と言って、服を受け取ってくれるのだ。そんな啓のおつきらぼうな優しさに、いつも惹ひかれてしまう。

「ふふ、ありがとう。じゃあ、それがバレンタインの代わりね」

「ひなみ、バレンタインつてのはチョコを渡すイベントなんだぞ」

「そう？ 別にいいじゃない」

ひなみは一度も啓にバレンタインのチョコを渡したことがない。お菓子作りは得意でないから、どうしても買ってきたものになってしまう。それに啓はモテるから、チョコなんていろんな女の子からどっさりともらってくるのだ。それは昔からの恒例イベントで、ひなみをいつもヤキモキさせた。

自分なんかチョコをあげても、きつと他の女の子たちからのチョコの山に埋もれてしまう。なら自分の得意なことで腕を振りたい、とひなみと思うのは当然のことだろう。（啓くん、それ本命なんだよ……。わたしが服をプレゼンするのは啓くんだけなんだよ……）

それが精一杯の気持ちだ。

啓が脱いだ時よりも、自分が作った服を着てくれている時のほうが、自分があなたを

包んでいるような気がしてドキドキするのだと言ったら、彼はどう思うだろうか？

ひなみが言えない気持ちを抱えていると、啓が軽く首を傾げた。

「どうした？ ほーっとして。なんかあつたのか？」

「ん？ ううん。なんでもない」

そう答えたのだが、啓はじっとひなみを見つめてくる。その視線に、探るようなものが含まれているのを感じる。気まづく思い、ひなみは後ろでゆるく団子にした髪を撫で付けた。

本当は転職することを話したほうがいいのかもしれない。でも言いたくなかった。上京することを知ったら、啓は幼馴染みのよしみであれこれ世話を焼こうとしてくれるだろう。そんなことになつては、せつかく彼を諦めようと決めたこの気持ちが鈍ってしまうぞうだ。

「ほんと、大丈夫だから」

そう言いながら彼の横に座る。

「ならいいけど。なんかあるなら言えよ。おまえ裁縫以外なんもできないんだから。」

中学の頃の調理実習で作った菓子を、黒焦げどころか消し炭にしてたろ」

「うっ……」

痛い過去を突かれて顔が引きつる。

幼馴染みというのはこれだから困る。知られたくない過去も忘れたい過去も、全部お互いがお互いに筒抜けなのだから。

ひなみはモゴモゴと口の中で弁解した。

「そ、それは子供の頃の話だってば。今は違うって。普通のご飯はちゃんと作れるんだから」

普通を強調すると、啓は楽しげに笑ってソファにふんぞり返った。

「ほお？ そいつは知らなかった。嫁に行く前に俺が一度味見してやろうか。旦那がひっくり返らないか心配だ」

「い、いいよ……そんなの」

普段通りのやり取りだが、ほんの少し切ない。

啓はひなみが他の男の人のところにお嫁に行くことを当たり前に思っているから、そんなことが言えるのだ。

幼馴染みの壁は強固で、ひなみと啓の世界を護ってくれる代わりに二人を隔てる。この関係が変わることはないだろう。当の本人であるひなみが、この関係を崩すことを恐れているのだから。

「はいはいはい。コーヒーが入りましたよ」

二人の会話に、コーヒーを持ったひなみの母が割って入ってきた。会話どころか、ひ



なみと啓の間に無理やり大きなお尻を振じ込んで、啓の隣を横取りする始末だ。二人掛けのソファから押し出されたひなみは、哀れにも床に敷かれたラグの上に正座する羽目になった。

「ありがとうございます、おばさん。いただきます」

「どうぞ、どうぞ。啓ちゃん、お砂糖ひとつやもんね」

ひなみの母は、お節介にもコーヒーに角砂糖を入れて掻きませ、啓に差し出す。彼は迷惑そうな素振りさえ見せずに、笑顔で受け取っていた。

ひなみの父が淹れるコーヒーは、豆から挽いたこの店オリジナルの特製ブレンドだ。芳醇な香りと濃厚な味わいで、啓に限らずファンは多い。遠方から豆を買いに来るお客もいる。

本当は店で淹れたてを飲むのが理想なのだが、啓が喫茶店にいると彼のファンに目撃された時に大変なことになってしまうから、この瀬田家の住居スペースで飲んでもらうのが慣例になっていた。

「んー。うまい」

コーヒーを飲む啓を見ていた母親が、ニンマリと笑った。

「あ、啓ちゃん。もらってやってくれたんやね。ひなみのシャツ。ありがとー」

「どうですか？ 似合いますか？」

「似合う、似合う。啓ちゃんは何着ても似合うから、ひなみも作り甲斐があんでしょ。啓ちゃんの服はすっかり作ってさ。たまにはあたしらの服も作ってくれたらいいのに」

「わたしはメンズボタンナーなんだけど……」

そりゃあ、レディースも作れないことはないが、人にはやはり得意分野というものがある。それに、店で父が着ているマスターの制服も、今母が着ているエプロンも、作ったのはひなみだ。母の私服だってサイズ直しくらいは普段からしているし、それなりに貢献しているつもりだと懇々と語るひなみの傍らで、まるっきり聞く耳を持たない母親は啓との会話に夢中だ。

「あのね、啓ちゃん。ひなみから聞いた？ この子ったら会社辞めちゃったのよー」

「は？」

母親のぶっちゃけトークに、啓の目が点になっている。

ひなみはアワアワと唇を震わせた。

「な、ななな、お、お母さん!？」

「啓くんには言わないでって言ったのに!」

転職を決めたひと月前にそう頼んでいたものを、もう忘れてしまったのだろうか？ 慌てるひなみには一瞥もくれず、母の暴露は止まらない。

「石田さんだか、石坂さんだかという人に誘われて、その人の会社に行くんやって。それ

が東京なんよー。初めての一人暮らし、大丈夫やろか？」

「まだ会社辞めてないし！ あと一日行くし！ それに石田さんでも石坂さんでもなくて石上さんだってば！ ってか啓くんには黙っといてって言ったでしょ!？」

耐えきれずに叫ぶ。だが、母親は反省のかけらも見せずにペロツと舌を出し、「そーだっけ？」と、すつとほけて立ち上がった。

「なんかひなみに怒られたあー。怖い、怖い。にげよつと」

もうすぐ六十歳になろうというのに、女子高生も真っ青な弾けた声を残して、母親はすたこらさつさと店へと下りていってしまった。

そうなると、リビングにはひなみと啓の二人が残されるわけで――

「ひーなーみーさーん?」

意図的に啓から目を逸らしていたひなみだが、呼ばれて無視できるほど、凶太い神経は持ちあわせていない。

恐る恐る声のするほうを見ると、ソファに座った啓がニコリと満面の笑みを浮かべてひなみを見ているではないか。しかも目が笑っていない。三日月形に薄く開いた目は、さながら魔界の魔王様のようで、正直怖い。顔が整っているだけに余計に。

「えつと……あの、その……」

ひなみが言い訳を並べようとまごついていると、啓が自分の足を指差した。

「おい、ひなみ。おまえ、ちょっとここに座れ」

「はひい!」

裏返つた声で返事をしつつ、ジャンピング土下座で啓の足元に這いつくばる。すると、ぐいっと顎が持ち上げられた。

「聞いてないんですけどオ?」

「い、言ってますので……」

なぜか敬語で対応してしまう。それがかえって啓の逆鱗に触れてしまったようで、ずっと彼の顔が近付いてきた。その距離、わずか三センチ。鼻の頭が今にも触れ合いそうなほど近い距離に、ひなみはクラクラしてきた。しかもなんだか彼はいい匂いがする……

「なんでそんな大事なこと言わないんだよ。今まで、なんだって俺に話してただろ。おばさんに口止めまでして、水臭いじゃないか」

「なんでって……ま、まだ会社辞めてないし……引つ越してもまだ先だし……」

実は引つ越してからも言うつもりがなかったことは、この際だから言わないでおう。相談しなかったことで、啓がこんなに不機嫌になるとは思わなかった。余計なこと言えば、火に油を注ぐどころかダイナマイトをぶち込む結果になりかねない。

啓は眉間に深々と皺を寄せながらも、不承不承といった体でひなみから手を離れた。

ソファに凭れる彼は、まだ納得したようには見えない。だが、とりあえずは解放されたことにほっと息をつく。あんなに整った顔が急接近してくるのは、いくら幼馴染みとはいえ心臓に悪い。怒った顔でもイケメンはイケメンだ。ひなみの心臓は、口から飛び出しそうなほどバクバクと大きく脈打っていた。

「いつだ？」

「へ？」

聞かれた意味が瞬時には呑み込めず、きょとんと目を瞬く。すると啓はチツと鋭く舌打ちして、大きな声で言い直してきた。

「いつ引越すんだよ？」

「えと、来月中には住むところを見つけたいなんて思ってた。実際に働くのは四月から……」

「ふーん。まだ家決まってるのか。で？ その石田とかいうのは……まさか男？」

「だから石上さんだってば。男の人だよ。石上先輩は二年前まで同じ会社で働いてたの。わたしに工業パターンをいろいろと指導してくださった方で、とてもお世話になったの。今は独立して、自分のメンズブランドと会社を作って活動されて。人手が足りないから来てくれないかって……わたしのこと必要だって仰ってくださった……」

自分が転職することになった経緯を話していると、みるみるうちに啓の表情が険しく

なっていく。

「啓くん？」

「は……なんだよそれ。おまえ、そいつとデキてんのか？ だから俺に相談しなかったのか？」

ひなみの呼びかけには応えず、啓はその整った顔を大きく歪めている。ひなみはというと、啓の言葉は聞こえてはいるものの、意味がわからずに呆然としていた。

「な、なに？ それ、どういう意味……？」

「俺なんの相談もしなかったってことは、迷わなかったことだろ？ 同じ会社で働いてたって、まさかずっと男がいたのか？ 俺に内緒で？ その石上って奴と付き合ってるから、転職に迷わなかったんじゃない？」

目の前がカッと熱くなった。逆流した血液が一気に心臓に流れ込んできたかのように、胸が痛みを覚える。

啓への恋を諦めようとしたひなみだが、この長年胸に秘めた想いを別の人に向けているなどと思われたくない。しかも、よりによって啓に。

悩まなかったわけじゃない。迷わなかったわけじゃない。ひなみなりに必死によく考えた上での決断なのだ。それを言うに事欠いて、石上と付き合ってるのかだなんて！

昂った気持ちで涙になってあふれてきた。

「な、なんでそんなこと言うの？ わ、わたしが好きなのはずっとずっと啓くんなのに……！」

言ってしまった。

啓の思い違いを否定するためとはいえ、ずつと言うつもりのなかった気持ちを、ここへきてついに言ってしまった。後悔と安堵あんどが緬ない交まぜになった複雑な気持ちだが、胸いっぱい広がっていく。

ひなみは俯うつむいて、ギユッと唇くちを噛かんだ。

まるで時間が止まってしまったのではないかと思うほど、長い時間が経った気がする。なのに啓は何も言わない。ソファに座ったまま、身じろぎひとつしていないようだ。

彼は今どんな表情かおをしているのだろう？ 反応がないことが余計に怖くて、顔を上げられない。

ポタポタと流れ落ちた涙が、ひなみの手の甲を濡らした。

恋なんかしているから、こんなに苦しいのだ。どうせ叶わない恋なのだから、早く終わってほしい。

自分の意思で終わらせられないから環境を変えようとしたのに、それが啓の意に沿わないと言うのなら、もう彼に終わらせてもらう他ないではないか。

「もう、やだ。早く失恋しちやいたい。啓くん、早く振ってよ……」

長い沈黙に耐えかねて、泣き声を押し殺しながら呟つぶやく。すると、ラグに啓が膝ひざを突いた。

「なんで……そんなこと言う？」

そう言った啓の声が困惑している。自分の気持ちはやっぱり彼を困らせるだけのものだったのだと思って、ひなみはますます涙した。

「だって……、無理、だもん。啓くんは、西條要さいじょうなんだから……。わたしなんか、絶対釣り合わない……」

ひた隠しにしてきたマイナス思考を吐露とろすると、頭の上に啓のため息が落ちてきた。

それが呆おろれ果はれたものに聞こえて、彼を困らせるどころか嫌きらわれてしまったのではないかとひなみをビクつかせる。

（どうしよう……啓くんに嫌きらわれるのはいやだ……絶対にいや……）

振られる覚悟はしているけど、嫌きらわれるのだけはいやだ。浅あましくも、幼馴染おきななしみの距離は保ち続けたくて彼から離れようとしていたのに、それすら叶かなわないなんて。

やっぱり告白こひなんてするんじゃないかな……

そうひなみが後悔くわいしていると、大きくて温かい手のひらに、よしよしと頭を撫なでられた。「そんなこと考えてたのか？ えらく俺おれを買かい被かってくれてんだな、おまえは」

呆おろれてはいるものの、啓の声色がいつもよりも優しい気がして、ひなみはおずおずと顔を上げた。

「ばーか。そんなに泣くなよ」

頭を撫でていた啓の手が、今度は涙を拭ってくれる。

頬を両手で包み込み、コツンと額を合わせるその仕草は、ひなみを嫌っている態度ではない。同情なのか優しさなのかまではわからなかったが、彼がそうしてくれるのが嬉しくて、ひなみは泣きながら目を閉じた。

「ひなみがそんなふうに考えてたなんて知らなかった……。でもさ、俺はひなみが思っているような男じゃないかもしれない。実際に俺と付き合ったら、ついていけないって幻滅するかもしれないぞ?」

「……そんなこと、絶対にならないよ。啓くんが優しいの、わたし知ってるんだから……」

時々、つつけんどんな物言いをしてくることもあるけれど、その裏ではいつも優しい。少し照れ屋なだけで、人一倍真面目で気を使う性格の啓。

西條要は世の女性の王子様となっているが、そんな啓が自分には無骨な素顔を見せてくれる。その現実には優越感を持っていたことを、ひなみは否定できない。それが幼馴染の特権であり、ひなみの足枷あしかげだったのだ。

啓の親指が頬の上を繰り返して滑るのを感じながら、ほっと息を吐く。頬と額から伝わる彼の体温に安心して、少し力が抜けた。

「あのさ、ひなみ」

呼ばれて、ゆっくりと目を開ける。同時に、啓との距離が近いことに気まずさを覚えて身体を引こうとしたのだが、彼の手に肩を抱かれて制止されてしまう。結局ひなみは、至近距離で視線を合わせることに耐えかねて、目を逸らして話を促した。

「な、なあに?」

「ひなみが俺のこと好きならさ。俺と付き合ってみるか?」

「……え?」

思ってもみないことを言われ、驚いて啓を見ると、彼は優しい眼差しで笑っていた。

「俺さ、おまえのこと嫌いじゃないから、振ってくれて言われても無理なんだわ。どうせならトコトン付き合えばいいだろ?」

軽い口調で言うが、内容は衝撃的だ。唐突すぎて、涙も引っ込んでしまう。

「つ、付き合うの……? わたしと、啓くんが? なんで?」

「……なんでって。いやならいいよ」

途端に素っ気なくなった啓が、ひなみをあしらってソファに座り直す。それが心の距離をあけられたように感じ、ひなみは思わず彼を追いかけていた。

ラグに座ったまま、啓のニットの裾を握りしめ、彼を見上げる。だけど、言葉が出てこない。

「……」

「どうする？ 俺と付き合う？」  
振る理由がないと彼は言った。ひなみのことは嫌いではないとも。それは恋愛感情というより、友情の延長ではないのか。自分に対してそういう感情しか持たない相手と、付き合ってもいいのだろうか。

思えば、ひなみは啓が好きという気持ちはずっと持ち続けてきたが、彼とどうこうなりたいたなどと考えたことはなかった。意図的に考えないようにしていたのかもしれないが、啓と付き合う自分が想像できない。

だが——、ひなみに断るといふ選択肢はなかった。啓が自分と付き合ってもいいと言ってくれたのだ。

一人、部屋でうじうじと悩んでいた時とは違うほうへ、啓の手によって引き上げられていくようだ。

気が付けばひなみは、こくと頷いていた。

「よし。じゃあ、今からおまえは俺の彼女な」

啓が、座り込んだままのひなみの手を取ってぐいっと引き起こし、自分の隣に座らせる。そして彼は、不敵に笑った。

「そうだな……。ひなみが上京するなら、一緒に住むか」

「えっ、えっ？」

啓は「住むか？」とひなみの意思を聞いているわけではない。「住むか」と決めにかかっている口振りだ。

目を白黒させるひなみをよそに啓は大きく伸びをして、天井を仰いだ。

「俺の今のマンションな、あの記事のせいか記者が張り込んでてさ。実はあんまり帰ってないんだわ。ホテルとかマネージャーの家に泊まるのも飽きたし。どうせ他に部屋借りるつもりだったからちようどいいや。ひなみの新しい職場はどこになるんだ？」

「青山だけど……。え、でも……」

啓が置かれている状況と言いつ分はわかったが、彼と付き合うことになったこともまだ信じられないのに、一緒に住む？ 展開が速くて、頭がこんがらがってきた。

（啓くんと一緒に住むって……わたしが？ 二人で？ それ、いいの？）

もちろんそうなら嬉しいが、西條要と一緒に住むなんて、世間の女性ファンが許してくれないような気がする。

しかし——

「青山な。わかった。ああ、おじさんとおばさんにちゃんと話してからじゃないとな。こういうのは早いほうがいい」

啓はひなみの心配とはまったく違う方向に気を回しているのか、言うなり立ち上がった。

「ちよつと行ってくる」  
 「へ？ 行くつてどこへ？」  
 「下に決まつてるだろ」

未だに理解の追いつかないひなみを置き去りにし、啓は一人で瀬田家の玄関を抜けて、一階の喫茶店の勝手口を開ける。ひなみは慌てて彼のあとを追った。

「啓くん！」  
 ひなみの呼び声は聞こえているはずなのに、彼は止まらない。キッチンを抜けてホールにまで入っていく。

昼のピークからしばらく経っているので、喫茶店にお客の姿がないのが幸いだ。ホールの中央で立ち止まった啓は、のんびりと窓を拭いているひなみの両親に、明るい声で話しかけた。

「おじさん、おばさん。さっきひなみが、俺のこと好きって言うってくれたんです。俺もひなみのことずっと好きだったから嬉しくつて。俺、ひなみが上京してくるなら一緒に住みたいんだけどいいですか？」

ついさっきまで二階で繰り返していたことを、凄まじく歪曲した形で吐き出される。ひなみは啓の後ろ姿を見つめたまま、水から揚げられた金魚のように口をパクパクと動かした。

（お父さんとお母さんに何言っちゃってるの!? 一緒に住むって本気なの?）

いや、ひなみにとつてそれ以上に衝撃だったのは、「俺もひなみのことずっと好きだったから」の部分だ。そんなこと、彼は二階で一言も言っていなかったではないか。

……冗談なのだろうか？ それとも同棲の許可をもらうための方便なのだろうか？（方便かもしれないけれど、いきなり同棲だなんて言ったら、お父さんもお母さんも驚くに決まつてる——）

——そう思って両親を見ると、案の定、特に父親のほうが目も口もぼつかりと開けて驚いていた。

「は？ おまえら、まだ付き合つたらんかったんか？」  
 「そっち!？」

思わずツツコミを入れてしまったひなみを遮って、母親は豪快に笑う。

「実はそうなのよお。ひなみが素直じゃないからもたついちゃって。啓ちゃんが美人女優と噂になったもんだから焦ったんやない？ 小川さんの奥さんと二人でヤキモキしとったんよお。やつとまとまるところにまとまったみたいやね」

「なんだ。啓ちゃんの親父さんと、東京と神戸つちゆう距離があかんから、ひなみは転職するんやないかって、話しとったばっかりやったのに」

（いや、なんか違うんだけど……）

悩み抜いた末に出した転職という結論を、ものすごく妙な形で取り違えられて、軽く脱力してしまう。どうりで、両親に転職を反対されなかったはずだ。

それどころか、ひなみと啓が前から付き合っていたと思ひ込んでいたらしい父親を見ていると、一から説明する気も失せる。

啓への気持ち一度も人に話したことはなかったのに、自分の両親だけでなく、啓の両親にまで筒抜けだったのか。恥ずかしいやら、悔しいやらで複雑だ。

しかも、

「ひなみが東京で一人暮らしやなんて心配やったけど、啓ちゃんが一緒に住んでくれるんやったら安心やわ」

「そやな。つーか俺は最初から二人は同棲するんやとばかり思ってたかな。啓ちゃん、ひなみの面倒頼むわ」

「はい。任せてください」

だなんて、三人して笑い合っているのだ。

(な、なんか……とんでもないことになったような……)

顔を引きつらせ何も言えないでいるひなみを、満面の笑みを浮かべた啓が振り返った。

「じゃあ、ひなみ。部屋見せてよ」

「へ、部屋？ わたしの？」

繰り返すひなみに、彼は芝居がかった仕草で肩を竦めた。

「俺、今日の夜には東京に帰るからさ。俺が部屋を探しておくほうが効率いいだろ。ひなみが持つてくる荷物の量を、目安として知っておかなきゃならないからな」

東京の地理に疎い上に、一度も一人暮らしをしたことのないひなみが物件を探すよりも、啓に見繕ってもらったほうが確かに効率がいい。それに、ひなみの荷物には、服作りに使う工業用ミシンや、人台、作業台などの大物がある。書籍類は置いていけても、服作りの道具は置いていけない。

「ひなみ。部屋の話は、啓ちゃんに全部任せんね。そのほうがええんちゃう？」

「う、うん……わかった……」

なんだかまだいろいろと釈然としない思いはあるが、今は何かと口を挟んできそうな両親の前から離れたくて、ひなみは頷いた。

「じゃあ、えと、行こ……」

再び瀬田家の住居スペースに戻って、三階へと案内する。

啓がひなみの部屋に入るのは本当に久しぶりだ。お互いの部屋を歩き来していたのは高校生の頃までだった。啓が東京の大学に、ひなみは地元の四年制服飾系学校に進学してからは、なぜか家族を交えてリビングで会うことが多くなっていたのだ。

「ど、どうぞ」



妙に緊張しながら自室のドアを開ける。

ミシン台や、作業台代わりの折りたたみテーブル、ボダイ人台が鎮座している。下手をする  
と作業部屋のような無機質なイメージになりかねないが、そこはひなみが取り揃えた白  
とピンクを基調にした家具のおかげで、全体的に可愛らしい雰囲気になっている。

「あの本棚は置いていこうかと思ってるの。本も荷物になるし。服も全部持っていくつ  
もりはなくて、シーズン毎に実家に送ったりして入れ替えすればいいかなーって……」  
啓は部屋を見回しながら、ふんふんと頷いている。

「なるほどね。なんとなくわかった」

「あの、本当に一緒に住むの？ ってか付き合うの？ わたし……たち……」

（さつき下でお父さんとお母さんに言ったのは本当？ わたしのこと、好き……なの？）

一番聞きたかったことは聞けなかったが、それでも心に引っかかっていた質問を投げ  
かける。部屋の中央に立っていた啓は、ゆったりとひなみを振り返ってきた。

「住むよ？ 付き合うよ？ 当たり前だろ。家賃の心配ならしなくていいぞ。俺の隠れ  
家だから俺が出すし」

だいぶ軽い口調で返された。今ならこのノリで、自分のことを好きなのかどうかも聞  
けそうな気がする。

ひなみはモジモジと下を向きながらも、自分が持てるすべての勇気を振り絞って、一  
番聞きたかったことを聞くべく一歩彼に近付いた。

「あ、あのさ……さつき——」

「ひなみー」

くいつと腰を抱かれて慌てて顔を上げる。すると、なぜか啓が、そのまま後ろのベッ  
ドに背中からダイブした。彼に腰を抱かれていたひなみは、自然とそのまま彼の腹の上  
に押し掛かってしまう。

「な、何を——」

ふともも太腿まで捲れ上がったスカートを押さえ、啓の身体の上でアタフタしていると、彼の  
両手に頬を挟み込まれる。そうして引き寄せられてアツと声を漏らした時には、既に啓  
が啓のそれと合わさっていた。

（えっ、えっ？）

目を見開くひなみを、啓は柔らかい眼差しで見つめ返す。そしてふっと微笑み、唇の  
合わせ目を舌先でなぞってきた。

くちゅっ——と、本当に小さく濡れた音がして、思わずビクついてしまう。

ゆっくりと唇を離した啓は、唇を引き結んだまま真っ赤になっているひなみの頭を搔  
き抱いて、自分の胸に押し付けた。後頭部の丸みに沿って、ゆっくり、ゆっくりと頭を  
撫でられる。

啓の表情は見えないが、繰り返されるその動きはガチガチに固まっているひなみを解きほぐそうとしているようだ。啓の身体から、心地よい体温といい匂いがする。

ひなみが自分の身に起こったことを反芻する前に、啓が口を開いた。

「俺さ、付き合うからにはトコトンひなみのこと可愛がるつもりだから——」  
 そう言った啓に強く抱き込まれる。

ずっと好きだった人にキスされて、抱きしめられているのだ、ひなみの心臓はもう爆発寸前だ。彼の上から退くことができない。

一方で啓は、ひなみの頭を優しく撫でていた手を、頬に滑らせてきた。顎をゆつくりと持ち上げられて目が合う。挑発するような目なのに、それでいて甘い声で彼は囁いてきた。

「——覚悟しとけよ」

「~~~~っ！」

啓の声がお腹の底に響いてゾクゾクしてしまふ。

何も言い返せない。どんなふうにも可愛がってもらえるのかと期待してしまっているのは、間違いなく自分の中にある女の部分だ。

真っ赤になったまま引き結んだひなみの唇を、啓の指先がなぞった。

「そんな力いっぱい囁むなよ。跡が付くだろ。あとな、キスの時は目を瞑れ」

「……け、いくんも、開けてた……」

やっとの思いで掠れた声を出すと、彼は「へえ？」と笑って、瞳を妖しく煌めかせた。

「なら今度は瞑るわ。おまえも瞑れよ」

そう言った彼にぐっと引き寄せられ、軽く唇が触れ合う。しつとりと吸い付くような感覚に、ギュッと目を閉じる。

「んっ」

意識していないのに声が漏れて、軽く息が上がる。新しい酸素を求めて薄く開いた口に、生暖かいぬめりを伴ったものが差し込まれた。

「ふあ、んんっ」

それが啓の舌だとわかって肩に力が入るが、彼は躊躇いなくひなみの口内をまさぐり、舌を吸ってくる。

強くはない。ゆつくりとした舌遣いだ。それが余計に生々しい感触を大きくさせる。

ひなみは何もできない。ただ、啓にされるがままだ。心臓ばかりがドキドキして手に負えない。

ようやく唇を解放してもらった時には、涙目になっていた。

「も、もう……」

動揺しつつも、いきなりのキスに対する抗議として低く唸る。しかし啓は気にした素

## 立ち読みサンプル はここまで